

「通学合宿プログラム」誕生に至るプロセスの研究 ：旧庄内町「通学キャンプ」の実践分析を中心に

相戸， 晴子
宮崎国際大学教育学部

<https://doi.org/10.15017/1560834>

出版情報：生活体験学習研究. 15, pp.45-54, 2015-02-15. 日本生活体験学習学会
バージョン：
権利関係：

「通学合宿プログラム」誕生に至るプロセスの研究

— 旧庄内町「通学キャンプ」の実践分析を中心に —

相 戸 晴 子*

A Study of Historical Change of the “Tugaku gassyuku (Going to School from Camping Facilities) Program”

— Based on the Records of “Tugaku Camp” in Shonai-machi —

Aito Haruko*

要旨 1983年、「長期（通学）キャンプ」が誕生した。それは、豊かな社会教育実践基盤を持つ旧庄内町において、子ども会指導者らが、旧産炭地庄内の子どもの問題やものの豊かな時代における子どもの発達疎外への危機感から創り出した教育プログラムであった。「通学」は、大人たちの4年間に及ぶキャンプ場づくりのプロセスから、「長期」キャンプを実施する方法として発想された。子どもと大人の日常生活の延長上で長期キャンプを行うことによって、教育効果の高い生活体験学習を可能にした。1989年、通学合宿の専用施設、旧庄内町庄内生活体験学校（現・飯塚市）が建設され、「通学合宿」という事業名称で引き継がれ、現在に至り実践されている。

キーワード 地域課題、発達疎外、失われた子どもの生活、キャンプ場づくり、長期キャンプ、日常生活、通学

はじめに — 研究の目的 —

子どもの生活体験学習を目的に、全国約800箇所以上で取り組まれている「通学合宿プログラム」がある。全国的な広がりはあるものの、その実践現場では、「“通学”しながら合宿する」意義が十分に理解されていない状況が見受けられる。

そこで、本稿では、「通学合宿プログラム」の意義をあきらかにするために、その事業の前身である「通学キャンプ」事業に焦点をあて、どのようなプロセスを経て「通学」という発想が生まれ、「キャンプ」や「合宿」事業を通学しながら実施することになったのか。またその実践が、子どもたちにどのような教育効果をもたしているのかについて考察を試みる。また、旧産炭地庄内という地域で誕生した実践の意味も合わせて考察する。

1. 「通学合宿プログラム」誕生に至るプロセスについての研究

「通学合宿」の前身である通学キャンプについて、旧庄内町の通学キャンプの実践者でもある丸本・正平他（1985）¹⁾により、単発的な教育キャンプでは到達できない長期（通学）キャンプの教育効果があるとの実証的研究がある。そこでは、①認識の問い直しをせまる自然とのふれ合い、②意識の問い直しをせまる欠損体験の補完、③異年齢集団による生活など体験の質を向上させる実践が子どもたちに一定の効果をもたらしていると述べられていた。また、同じく小学校教員として実践に関わった石井（1986）²⁾の研究では、一般的なキャンプは、時間がない、課題を課していない、生活体験を取り入れていない、1回限りの人間関係、指導者（役員）の任

*宮崎国際大学教育学部

連絡先：〒889-1605 宮崎市清武町加納丙1405番地

電話：0985-85-5931 FAX：0985-84-3396 E-mail: haito@edu.miyazaki-mic.ac.jp

期が短く技能や意欲に期待できないという課題があるため、その課題を超えることを試みられたプログラムが、長期（通学）キャンプであるとの見解が示されていた。しかし、長期に質のよい体験に取り組む意義は共有されたものの、「通学」を合わせる発想や意義、またそれによる子どもの教育効果は十分検証されていない。

そこで、本稿では従来取り組まれてきたキャンプや合宿という営みに、なぜ「通学」を重ねることに至ったのか、またそれは子どもにとってどのような効果があったのかについて、そのプロセスからとらえていきたい。

2. 研究の方法

飯塚市生活体験学校で取り組まれている通学合宿は、1983（S58）年の通学しながらキャンプを行う「通学キャンプ」にその前史をみることができる。通学キャンプに関する資料は、①1979～1983年のキャンプ場づくりの4年間の足跡を記録した「庄内町青少年の森・教育キャンプ場のあゆみ」、②1983年の「長期キャンプの記録」、③1984～1986年に第2～4回が開催された「庄内町長期（通学）キャンプ」の資料集3冊、④1986年に実施された「庄内町子育て懇談会」の資料集の分析を中心に行う。

3. 旧庄内町の子どもの問題とものの豊かな時代における子どもの発達疎外への危機感

飯塚市庄内生活体験学校の通学合宿事業には、長年にわたって支え続ける指導者の存在があり、その多くは、1983年から実施された通学キャンプの実践者である。旧庄内町で始まった通学キャンプは、社会教育史にみる実践基盤と旧産炭地の子どもの現状認識、そして、ものの豊かな時代における子どもの発達疎外への危機感が誕生に至らせていた。以下、経緯を記す。

3-1 旧産炭地庄内の子どもの問題を解決するための実践

① 青年が支えた旧庄内村の公民館における子ども会活動

庄内村は、1931年に福岡県社会教育課により奨励された「福岡県全村学校奨励規定」をもとに、1937

年青年学校を併置する自治館（公会堂）を建設した。この自治館は、公民館のような施設機能を持ち、青年たちの活発な活動が展開されていた。1946年7月5日の文部次官通牒「公民館の設置運営について（発社122号）」が出されると、すでに公民館の基盤となる自治館を持っていた庄内村は、1947年3月8日、いち早く庄内村公民館の発館式を行った。

庄内町誌の「庄内村公民館活動の記録」（1948年1月1日から1950年1月11日）によると、公民館で取り組まれた子どもの活動では青年たちの関わりが大きかったと記述されている。例えば赤坂分館では、研修会・講習会が2年間に17回、童話会、紙芝居・幻灯会などを行い、読書会は毎週2回開催されていた。また、会議や研修の開催が7回、その他の行事、他地区からの視察もあった。さらに町誌によると、「青年層は、子ども会活動にも十分寄与している。童話会、紙芝居・幻灯会などに多いときは、160人を数える子どもが詰めかけ、その顔は輝いていた³⁾」とある。

また、公民館の発足とともに、「青年団と一体になり子ども会組織の結成促進とその運営方法の研究を重ね、子ども会の巡回指導班を組織し、各分館子ども会の結成を呼びかけ、巡回指導を実施、子ども会の結成はもちろん、その健全育成にいよいよ拍車をかけたのである。⁴⁾」とある。庄内の初期公民館では、「青年」が子ども会の組織化、運営、活動にも重要な役割を担っていたことがわかる。

② 旧産炭地庄内の子どもの非行と依存を打開する少年教育が期待された子ども会活動

1955年、庄内の各公民館で活動する子ども会指導者によって、「子ども会指導者協議会」が結成された。この協議会は、事業の企画や実施、指導者研修会を開催し、庄内町の子ども会指導者全体の資質向上を目指して作られた組織であった。結成直後に中核的な役割を果たしていたのは、炭鉱の子ども会指導者たちであった。⁵⁾

しかし、1958年頃から、石炭鉱業の合理化に伴い、他町村や県外への転出が相次いだ。3～4年の間に、全炭鉱が閉山し、炭住の消滅、人口半減と炭坑地域社会⁶⁾の様子は激変した。庄内町子ども会指導者協議会⁷⁾の役員も激減し、1961年には、炭鉱閉山の影響で、恒例の「子ども会大会」を継続すること

ができなくなるなど活動の停滞を余儀なくされた⁸⁾。

また、炭鉱閉山とともに、年少者の非行が増大した。1965年、夏休みの8月8日に庄内中学校で火災が発生し、全校舎の3分の2を焼失した。原因は失火によるものと推測されたが、少年非行の問題行動という認識が拡がり、子ども会活動を少年教育の機会と捉える気運⁹⁾が強まっていった。

1967年、嘉徳郡公民館連絡協議会の研究会において、庄内町公民館主事松岡芳信氏が、「少年教育（子ども会活動）の現状と今後の展望」をテーマに報告した。そこでは、「炭坑の閉山がもたらした深刻な影響、すなわち、生活への積極性がなく、無気力で、他に依存しようとする他力的な生活意識、これをどのように取り除き、更に『あすを開拓する意欲』をどう育てるかを少年教育の目標とし、子ども会活動の実践を通じて、その達成に努力したい。」と閉山後の庄内の子どもの現状を捉え、公民館としても子ども会活動によって子どもの意欲を育てる少年教育を目指していたことがわかる。

③ 非行防止や鍛錬を目的に模索を続けた「少年教育キャンプ」

1957年、当時高校3年だった正平氏は、庄内町の青空子ども会（綱分4坑1区）行事として、関の山2泊3日のキャンプ活動を主催した。正平氏が当時作成した「キャンプのしるべ」には、「自分の食器は自分で洗え、重たいテントはみんなの手で運べ」と自立と共同の考え方がすでに記されていた¹⁰⁾。1960年の庄内中学校の火災後、少年教育を模索していた子ども会指導者協議会のメンバーは、このキャンプ活動を参考に、1966年から3年間にわたって少年教育キャンプに取り組んでいった。1967年は、庄内町子ども会指導者協議会の主催、庄内町教育委員会、庄内町青少年問題協議会、庄内中学校の協力な

ど、町ぐるみで少年教育キャンプの実施がなされた。

「図表1」のように少年教育キャンプは、小学生は1箇所固定した2泊3日の初級キャンプ、中学生は嘉徳郡、朝倉、田川の3郡を移動し野営していく中級キャンプであった。中級キャンプは、単に山に登るだけではなく、移動のたびに身支度と身じまい、野営の設営と撤収がくり返し行われる厳しい鍛錬キャンプであった。この中級キャンプは、庄内町が企画・実施した少年教育キャンプとしては、最も難度の高い内容であったため、指導者の確保難や準備の大変さから継続されることはなく、1回きりの実践に終わった。¹¹⁾

3-2 もの豊かな時代における子どもの発達疎外

一方、1964年に行われた東京オリンピック景気にわく日本では、「ものの豊かさ」を目指す生活志向が主流となり、合理性・利便性を重視した生活が浸透していった。そこでは、家電製品の普及を始め、日常生活から生活労働が激減することによって、体験不足による子どもたちの発達疎外が顕著に現れていく時代となった。

1985年と1986年に庄内町公民館が行った「庄内町子育て懇談会」では、「挨拶や返事がきちんとできない」「人の話を聞く力がない」「たてのつながりや異年齢集団がない」などコミュニケーション能力の低下や関係性の乏しさ、また、「(物があふれて)がまんする体験や耐える力がない」「無気力で勤労意欲がない」「失敗を恐れる」など耐える力や勤労意欲の低下、また、「自己中心的」「いじめが多い」「(送り迎えする親が増え)歩く力がなくなってきた。」など人格形成の問題や過保護過干渉の悪影響、「掃除の仕方を知らない。後始末ができない。」「ナイフの使い方を知らない。」「自然とふれ合う遊び方を知らない。」という生活力や生活技能の低下など、子どもの発達疎外の状況を表す意見が多く出された¹²⁾。また、庄内小学校教員の石井太賀良氏¹³⁾は、1985年4月の5年生の自分の学級の子どもたちの状況について、「学習中に『私語』『よそ見』『手遊び』『指をくわえる』『突然席を立つ』『すねてその場から動かない』など幼似的言動が目立つようになった。」など学校教育現場で見られる集中力の低さや自己中心的な

図表1 少年教育キャンプの概要について

名称(特徴)・対象	参加人数	場所・泊数
初級(固定)キャンプ・小学生	40人	朝倉郡小石原村・2泊3日
中級(移動)キャンプ・中学生	13人	古処山麓野営→古処、屏、馬見の三山縦走・小石原村の初級キャンプに合流→英彦山麓で野営→英彦山登山・3泊4日

人格形成の問題行動に、学習以前の問題として危機感を抱いていた¹⁴⁾。

4. 「失われた子どもの生活」を取り戻すために 取り組んだキャンプ場づくり

4-1 「失われた子どもの生活」をとり戻すための キャンプ事業

1979年、正平氏は、当時の庄内町教育長朝原良行氏¹⁵⁾の要請を受け、庄内町子ども会指導者協議会の会長に就任した。正平氏は、旧産炭地の子どもの問題やものの豊かな時代における発達疎外の状況は、子どもたちが戸外で遊ばない、体験不足により危険回避の仕方を知らない、友だちとの集団生活を知らないなど、子どもの生活の中から減少し、やがては失われていったもの（日々の生活に必要で不可欠な

直接体験の世界）が教育を困難なものにしていると考えていた。

そこで、会長就任後すぐに、「失われた子どもの生活」を取り戻すキャンプ事業を提案した¹⁶⁾。庄内町教育長朝原氏が会長に要請したのは、正平氏の子どもへの育ちの問題意識とキャンプの実績や指導力を見込んでのことだった。

この提案を多くの指導者が賛同し、同年7月19日第2回目子ども会指導者協議会では庄内町全体の子どもの会でキャンプを行うことを決定した。キャンプ会場での協議では、町内にある「既成の商業化してしまったキャンプ場などは、社会情勢の変化が子どもに与えた悪い影響の上塗りをするようなもの。¹⁷⁾」との認識から、既成のキャンプ場ではなく未開の庄内町多田大ヶ原の町有林一帯をキャンプ場と

図表2 庄内町青少年キャンプ場設設計画¹⁹⁾ 抜粋

1. 設立の必要性（一部抜粋）

（略）子ども会や学校で増えつつあるキャンプ活動は、自覚されると否とにかかわらず、『失われた子どもの生活』をとり戻そうとする反省のあらわれと見るべきであります。いわゆる社会情勢の変化がもたらした今の子どもと、世の親たちが自分の子ども時代の生活とひきくらべて、今の子どもを自然のなかでもっと自由に伸び伸びと遊ばせねばならないと思ひ、友だちと集団で遊ぶ楽しさをわからせねばならないと思うのは当然のことです。

更に大切なことは、自分たちの食事を自分の手で作らせたり、寝起きの準備を自分でするという体験を通して、親から日常受けている世話の苦勞をわからせ、進んで人の世話をしようという姿勢や技能を身につけさせることは、今の子どもに最も欠けている面を補う教育だといわねばなりません。（略）

2. キャンプ場利用の形態

①学校キャンプの充実

②学校や子ども会の遠足の目的地として利用する。

③障害児教育活動の一環として、野外活動計画を研究し、取り組む必要がある。

④就学前の子どもを対象とする野外活動を研究し、取り組む課題がある。

⑤子ども会キャンプの充実：子ども会キャンプでは、学校キャンプでは取り組みにくいような内容を準備し、技能の面ではより高度の水準を目指す。

⑥ファミリーキャンプ（家族キャンプ）を実施する。

⑦利用者には、一定時間の作業を義務づける。

⑧キャンプ活動の水準を高めるために、それぞれの専門的な技能を持つ全ての町民の援助を要請する。

3. キャンプ場の候補地

庄内町 多田 大ヶ原 町有林一帯

4. キャンプ場の施設整備

①キャンプ場はほぼ東西に走る道を作り、通行と資材の搬入などに使う。

②幕営区域を指定し、最小限の整地をする。

③取水場・便所は地形・状況に応じて単数または複数作る。ゴミの集積場を一ヶ所作る。

④営火場をかねる中央広場をつける。

⑤緊急連絡のための季節電話をつける。

⑥学年全員を収容できる規模のバンガローをつける。

5. キャンプ場づくりの段階

①本年度中の可能な限り早い時期に、関係団体の協議を終らせ、町当局へ陳情する。

②55年度は、さしあたり運営中心の利用を想定する。道路・取水場・便所・倉庫が必要になる。

③57年度までに100人収容のバンガローを作り、59年度までに200人収容のバンガロー区域を完成させる。

6. キャンプ場づくりの留意点

①工事は、利用者の作業によって完成させる余地を残しておく。

②立木の伐採は極力避ける。

③外部の車の進入（二輪車を含めて）を防ぐ工夫をする。

④バンガローづくりは、利用者の作業参加を検討する。

⑤火気使用の区域、場所を指定し、山火事防止の工夫を十分ににする。

して要望して行った¹⁸⁾。

4-2 庄内町青少年キャンプ場づくりの計画

1979年9月6日第3回庄内町子ども会指導者協議会の会議では、「図表2」の「庄内町青少年キャンプ場設立計画」を作成し、翌日の同年9月7日に庄内町教育委員会へ提案した。

このキャンプ場設立計画では、その多くを町民が手づくりする提案がなされていた。「図表2」の「4. 施設々備」では、具体的な内容を示すことによって、町や行政関係者がどこを担うのか、また、町民が取り組んでいくところはどこかなどがわかりやすく説明されていた。また、スケジュールを公開することで、自分がいつ関わることができるのかを理解することができた。この計画やスケジュールが示されたことで、子ども会指導者、庄内小・中学校の教職員、額田小学校の教職員、社会教育委員、保護者、町民有志、利用者など、学校・家庭・地域の多岐にわたる人が、キャンプ場づくりに関わっていくことを可能にさせた。

また、「図表2」の「2. キャンプ場利用の形態」では、「⑦利用者には、一定時間の作業を義務づけ

る。」ことや、「6. キャンプ場づくりの留意点」の「①利用者の作業によって完成させる余地を残しておく」、また「④バンガローづくりは、利用者の作業参加を検討する」など、利用者にもキャンプ場を利用しながら、キャンプ場づくりに参画する仕組みが示されていた。これは、「私作人」と「私利用する人」の垣根を越えるための働きかけであり、誰もがキャンプの利用者であり主体者になり得る仕組みであった。

4-3 学校・家庭・地域が活用しやすいキャンプ場構想

「2. 利用の形態」をみると、この時点においては、学校・地域（子ども会）・家庭から活用されるキャンプ場をつくりたいという構想がみえる。学校においては、「学校キャンプでは取り組みにくいような内容」「技能の面ではより高度な水準」など、学校キャンプの充実を図るための活動拠点としてキャンプ場、地域においては、学校主催では限界のあるキャンプ活動を地域の人々とともにつくる活動拠点としてのキャンプ場、家庭においては、身近な生活圏に経済的負担もなく、自宅ではできない体験を家

図表3 庄内町青少年キャンプ場づくりの主な作業記録²⁰⁾

西暦（和暦）・【キャンプ場づくりに取り組んだ日数】・主な活動内容
1979 (s54) 年【2日】 子ども会指導者協議会：キャンプ場を作る必要性について協議・確認。(7/19) 子ども会指導者協議会役員会：具体的な構想を協議。(8/19) 子ども会指導者協議会：「庄内町青少年キャンプ場設立計画案」を協議・決定。(9/6) 議会開設認可。(12/)
1980 (s55) 年【12日】 子ども会指導者協議会役員会：キャンプ場づくりの具体的な問題を協議。(5/12) 子ども会指導者協議会：運営・利用上の問題と課題について協議。(5/27) 子ども会指導者協議会・公民館：合同で現地の施設計画について、協議・確認。(5/31) 開設式 — 便所、流し台、広場設置— (7/27) 電話の外線工事 (8/2)・板・角材置き場を作る。(8/8)・下草刈り、伐採作業。(8/12、8/19)・広場のみぞきり (8/19)・まきわり、まきづくり (8/27)
1981 (s56) 年【59日】 管理小屋づくり、第2管理小屋づくり (3/29～)・広場拡張—ブル押し— (4/13)・井戸掘り工事 (6/12～)・貯蓄槽すえつけ (7/12)・臨時電話設置 (7/20～)・シイタケ収穫 (9/13)・チャボ16羽放つ・イチゴ畑拡張、キンカン、ユズ各10本植樹・子ども会「子ども秋祭り」—約130名— (11/1)・ワークキャンプ—約20名— (11/22)・設営地 (松林) の伐採。下草刈りなど。
1982 (s57) 年【108日】 掘りゴタツづくり (1/15～1/30)・松林の伐採 (2/11～)・子ども会「子ども祭り」—約280名— (5/5)・常設電話設置 (5/5)・大屋根のための広場造成 (12/17、5/6、5・10)・大屋根づくり (5/12～)・子ども会指導者研修会 (6/26～27)・食卓づくり (7/22～)・電動ポンプ設置 (8/10)・プレハブすえつけ (8/24～)・子ども会「子ども秋まつり」—140名—馬2頭・整地作業、伐採作業
1983 (s58) 年【81日】 道づくりのための伐採 (2/11～)・第1小屋拡張 (4/29)・浴場、便所の増築準備 (5/14)・土間の拡張 (5/15)・プレハブ修理 (6/3)・伐採作業、(6/17)・管理小屋に整理棚作る (8/1)・下草刈り、清掃など。 第1回長期キャンプ実施 (10/6～9)

族が協力しながら取り組むファミリーキャンプができる活動拠点としてのキャンプ場などの活用が目指されていた。

4-4 多くの町民が参加したキャンプ場づくり

1979年9月6日に庄内町子ども会指導者協議会で協議・決定された「庄内町青少年キャンプ場設立計画」は、同年の12月議会にて認可され、キャンプ場づくりが始動する。

1980年5月の子ども会指導者協議会役員会や協議会において、キャンプ場づくりの具体的な問題や運営・使用上の問題点と課題について協議を重ねた。また、同年5月31日には、子ども会指導者協議会と公民館の合同会議を開催し、施設計画についての協議・確認をした。協議会や協議会役員会、また公民館との会議（「図表3」）を重ね、1980年7月27日のキャンプ場の開設式を迎えた。

1980年7月、開設式を終えると、キャンプ場設立計画に基づいた手づくりキャンプ場づくりが始まった。「図表3」の作業記録をみると、1980年は12日、1981年は59日、1982年は108日、1983年は81日の作業が行われたとある。第1回の長期（通学）キャンプが実施されるまでの準備期間においては、ピーク時3～4日に1回の割合で作業が行われていたことになる。

5. キャンプ場作りから認識された長期キャンプの必要性

5-1 庄内の子ども誰もが参加できるキャンプ事業を目指して

正平氏はキャンプ場づくりに取り組みながら、「自分自身が企画実行してきたキャンプは、ほとんどが夏休みに季節イベントで終わっていた。この点にひっかかった気分のまま時間が過ぎていた。²¹⁾」と、イベントではないキャンプとは何かを求めて、子ども会指導者協議会での検討を続けていた。目指していたのは、ボーイスカウトのような、年間を通して継続的に、自然の中で仲間との共同作業を行い、生きていくうえで必要な技能や習慣、社会性を養うという活動のイメージだった。しかし、ボーイスカウト活動に参加するためには、制服の購入や会費など一定の費用が必要だった。旧産炭地庄内の子

どもにとって、ボーイスカウト活動は誰もが参加できる仕組みにはなり得なかった。そこで、子ども会指導者が中心となり、経済的負担がほとんどない庄内の子ども誰もが参加できるキャンプ事業を前提に計画されたのであった。

5-2 大人たちが仕事をしながら作業をして実感した長期キャンプの必要性

1979年から始まったキャンプ場作りでは、1980年、1981年と作業に関わる大人の「日数」や「人数」が年々増えていった。

4年間に及んだキャンプ場作りでは、多くの大人たちが、子どもたちの「失われた生活」を取り戻すために、①自身の力で食べる、寝る、自然から身を守る、清潔、掃除などの生きていくための生理的欲求（衣食住）を満たしていくための活動拠点づくり、②仲間とともに生活を営み、かけがえのない存在であることを確認し合う人間関係を育むための活動拠点づくり、③野菜づくり、ものづくり、自然との共生、動物とのふれあいなど、生活文化（技能や知識）を獲得していくための活動拠点づくりに取り組んでいった。

作業に関わった大人たちは就労しているため、ほとんどの人は平日の業後や休日にキャンプ場づくりに継続して取り組み続けた。この作業は、キャンプ場を作るための作業であったが、同時にそこに関わった大人たちにとって、自然の中で継続してキャンプを営む生活体験学習の時間でもあった。

作業を通して寝泊りを繰り返し、飲み食いしながら熱く語り合う日々を重ねていく中で、「1泊や2泊の短いキャンプではなく、10泊程度の長いキャンプをやろう」という提案がなされた。これは、大人自らがキャンプ場作りに長年関わり、自然の中で継続したキャンプ生活に取り組んだことによって、長期にキャンプを行う必要性を実感したからこそその提案だったといえる。

6. 長期キャンプに「通学」を重ねるといふ発想の誕生

6-1 長期（通学）キャンプと一般的なキャンプの比較検討

キャンプ場づくりを通して長期にキャンプを行う

意義は共有されてはきたものの、あらためて子ども会指導者協議会の会議で、長期キャンプについて具体的な検討を行っていく必要があった。会議では、「誰が長い期間の指導を受け持つのか？安全への配慮は？必要な予算は？」などの意見が相次ぎ、実際に長期キャンプを実行していくためには多くの課題を解決しなければならなかった。そこで正平氏は、指導者が仕事を休まなくても長期に開催できるキャンプであり、安全で負担の掛からないキャンプの方法の一提案を行った。それは、野外活動家の音成彦始郎氏が構想していた「キャンプをしながら仕事に通う大人のキャンプ」を基に、「キャンプをしながら学校に通学する子どものキャンプ」にしてはどうだろうかという提案であった。

この提案は、普通なら議論される余地のないものであったに違いないが、これまで仕事をしながらキャンプ場づくりに取り組んで来た大人たちにとっては、“出来るかもしれない”と自信を感じていたようである。子ども会指導者協議会では、「長期（通学）キャンプ」と「一般的なキャンプ」の効果の違いについて具体的な検討が始まっていった。

「図表4」は、子ども会指導者協議会の中で協議された記録をもとに、長期（通学）キャンプと一般的な子ども会等で取り組むキャンプについて、石井が作成した表をもとに相戸が加筆修正した、活動日数、通学の有無、通学の緊張感、生活体験の頻度、人間関係の濃さ、場所、実施可能な回数、指導者の関わり、教育効果の比較一覧である²²⁾。

協議した結果、長期（通学）キャンプは、長期間のキャンプ活動が可能となること、子どもたちが通学という回避できない課題を課すことによって、適

度な緊張感を持ってキャンプ活動に取り組めること、学校に行くという日常的生活の中で体験できること、子どもと大人という縦集団、子どもと子どもによる横集団の関係の中で、共同作業や共同生活を行い、他人と協力しなければ生活していけない人間関係の状況を設定できること、キャンプする場合は学校に通える身近な日常生活圏の自然豊かな場所で行えること、実施可能な回数は1年中何回でも実施でき、指導者が仕事をしながら関わるのが可能であること、そして、生活体験を長期にわたって行うことによって、教育効果が期待できるという意義を見出すことができた。

これらの協議から、「長期（通学）キャンプ」を行っていくことによって、当初懸念されていた指導者・安全・予算の課題は、身近な生活圏で指導者の過度な負担なく指導でき、且つ安全・低予算で、なお且つ高い教育効果が見込まれるプログラムであることから、解決できることが確認された。

こうした子ども会指導者協議会の議論と当時の庄内町教育長の朝原良行氏から「最初は短い日程からでも始めてみよう²³⁾」との後押しを受け、1983年、「通学」を位置づけた「長期キャンプ」の第1回をスタートさせた。

6-2 「通学」を前提に組み立てられたキャンププログラム

1983年から取り組まれた長期(通学)キャンプは、以下「図表5」のような前期と後期の日程で構成された。各年のプログラムは、後期の通学しながらキャンプをする体験を中心に、前期はその事前準備や練習、鍛錬や長時間が必要な体験が組み立てられ

図表4 石井（1991）を参考に筆者が加筆した長期（通学）キャンプと一般的なキャンプの比較一覧

長期（通学）キャンプ	比較項目	一般的なキャンプ
長い	活動日数	短い
ある	通学の有無	なし
（学校に通う緊張感）がある	緊張感	（学校に通う緊張感など）あまりない
日常的な継続した生活における体験	生活体験の頻度	非日常のイベント体験
子どもと大人、子どもと子どもの関係・協力なしでは生活できない関係	人間関係の濃さ	子ども中心の関係・1回限り（その場しのぎ）の関係
日常生活圏内の自然豊かな場所（学校に通える範囲の場）	場所	日常生活圏から離れた場所（山や海や島など非日常を経験する場）
1年中何回でも実施できる	実施可能な回数	年（長期休暇）に1回程度
仕事をしながら関われる	指導者の関わり	仕事をしながら関われない
期待できる	教育効果	期待できることもある

図表5 長期(通学)キャンプの概要

項目	前期プログラム	後期プログラム
【日程】 第1回：5泊7日 第2回：9泊11日 第3回：10泊11日 第4回：10泊12日	(夏休み) 1983年8月25(木)～27日(土) 1984年8月26(日)～29日(水) 1985年8月25(日)～29日(木) 1986年8月24(日)～28日(水)	(2学期中) 1983年10月6(木)～9日(日) 1984年9月3(月)～9日(日) 1985年9月2(月)～8日(日) 1986年9月1(月)～7日(日)
【通学日数】 第1回 第2～4回	0 0	2日間 5日間(火・水・木・金・土)
【前期後期共通の日々の活動】	<ul style="list-style-type: none"> ・5時半起床、21時半就寝の規則正しい生活時間の設定。 ・朝食、昼食(通学日は弁当を作って持参)、夕食は自分たちでつくり、後片付けを行う。 ・学習時間が設けられている。 ・班会議を行う。 ・営火をする日がある。 	
【前期後期それぞれの活動の特徴】	<ul style="list-style-type: none"> ・キャンプサイトの設営と撤収の練習 ・キャンプ場から学校までの登下校の練習(演習) ・弁当づくり(練習)、うどん、ところてんづくり、芋とヒジキのみの食事 ・早朝登山、移動キャンプ、結策法懸垂降下の学習 ・小屋づくり ・野草教室と採集、植性調査、堆肥づくり、落花生の草取り ・乗馬練習と馬体・馬具の学習 	<ul style="list-style-type: none"> ・キャンプしながら通学する。 ・キャンプ場と学校までの登下校 ・風呂を作り入浴や洗濯をする。 ・キャンプサイトの撤営と清掃 ・乗馬教室や乗馬練習(手入れ)

た。

通学キャンプは、1983年の第1回長期キャンプにおいて、2日間の通学という試行的な取り組みとして始められ、2回目からは3年間にわたって5日間の通学をプログラムに位置づけた。

通学キャンプは、前半は夏休みの終日キャンプ活動、後半は2学期の通学しながらのキャンプ活動との二段階の構成で行われた。後期に4キロの道のりを1時間掛けて通学しなければならないという大きな課題を設定しているため、その課題を達成するための前期プログラムのメニューが設定されている。具体的な前期の活動では、子どもたちが寝泊まりするキャンプサイトの設営と撤収をスムーズに行うための練習、子どもたちがキャンプ場から学校まで遅刻せず通学するための練習、また安全に登下校するための演習などが行われた。

また、後期の活動では、朝5時半の起床時間は変えずに、洗面、朝食と弁当づくり、片づけまでして、通学しなくてはならない。さらに、下校後は夕食づくりや入浴、学習をこなし、21時半に就寝しなければならない。学校生活では、「通学キャンプ」だからといって特別扱いされないのである。

終了後は「長期キャンプ参加者の保護者アンケート」を行い、「申し込みにおける子どもの意志、参加

経費、開催時期、前期後期の二段階構成、前期終了時や後期終了時の子どもの様子、学習時間、登下校、体験、期間(長さ)、次回参加の意志」について質問し、この事業が妥当であったかどうかを判断していった。アンケートの結果では、ほとんどの項目において、「概ね良い、妥当、成果があった」という回答があり、「通学」を導入したことについての子どもへの過度な負担や安全上の問題がないことを確認することができた²⁴⁾。

また、指導者においても、保護者のアンケート結果や子どもたちの作文、そして自身の関わりの中で効果を実感したことから、仕事をしながら取り組める「長期(通学)キャンプ」事業に確かな手応えを感じていた。そこから、2年目以降、「通学」を5日間に増やし、本格的な「長期通学キャンプ」プログラムを始動していくこととなった。

7. 子どもの作文にみる長期キャンプに「通学」を合わせたことによる教育効果

1～4回の長期(通学)キャンプの資料集²⁵⁾には、前期、後期それぞれのキャンプに参加した子どもの作文が綴じられている。そのいくつかをみて、キャンプに「通学」を合わせたことによる教育効果を考察する。

「ぼくは、キャンプ場から学校までいきかえりするのがとてもきつかった。こんなにきついとは、思わなかった。次の日の朝は、ものすごくさむかった。まだ、まっくらだった。その日は、雨がふってびちょびちょだった。朝5時30分にきしょうだったのが、6時になってしまった。だから学校におくれてしまうと思った。(1983年・小学4年・男子A)」

小学4年男子Aは、キャンプをしながら4キロの距離がある山道を通学する「きつさ」を実感していた。また、自然の中でキャンプ生活をするることによって、天候不順に見舞われるなど自然の厳しさにも直面していた。また朝、寝過ごし、学校に遅刻するのではないかと生活時間を意識しながらキャンプに取り組んでいた様子がわかる。

「学校に行くさいしょの日はよかったけど、つぎの日からは、ばてるようになったが、負けずにがんばってあるいて、やっと学校へいけた。かえって、ごはんを食べたのがおいしかった。(1984年・小学6年・男子B)」

「ロングキャンプはとってもきついです。朝は、5時30分におきたり、ここから通学いろいろときついことがありました。でもきついことがあるから楽しいこともあるんだと思いました。それは10泊12日のさいごの夜は、きついこともわすれるようなたのしいキャンプファイヤー、パーティーです。(1985年・小学6年・女子C)」

小学6年男子Bと小学6年女子Cは、「通学」することが、キャンプの中で最も「つらかった、きつかった」と記述しているが、頑張ることによって、「ごはんがおいしかった」、「たのしい行事」などを味わうことが出来ていた。男子Bは、初日はつらさを感じなかったが、2日目以降、ばてそうになりながらも4日間「通学」をやり続けることが出来ていた。きついことも、繰り返しやり続けることによって、満足感や達成感に変わっていることがわかる。

「後期の仕事は学校へ行かなければいけなかったもので、いそいでしたのでたいへんだった。(1985年・中学1年・女子D)」

「後期はきつくてとても大へんでした。通学の時、道の悪いところなどがあって、こまりました。それと、朝食づくりがおくれたときなどは、学校はちこくです。でも次の日から、ちこくなどしませんでした。(1985年・中学1年・女子E)」

「最初の日、ねむれなくて学校でねむたくなかったけど、後の方になると、五時半におきるのもなれました。(1984年・小学6年・女子F)」

中学1年女子Dは、キャンプ生活での営みを一連の「仕事」として捉えていた。遅刻しないように、朝の「仕事」をこなしていくため、「いそいでした」など仕事のやり方や段取りを考えて取り組んでいたことが伺える。

中学1年女子Eは、遅刻したことを反省し、なぜそうなったのかという理由をしっかりと捉え、二度と遅刻しないための取り組みをしていったことが伺える。失敗からの学びの効果といえる。

小学6年女子Fは、前半はうまく睡眠がとれない様子であったが、後半では早起きに慣れ、苦にならなくなった様子が伺える。通学しながら継続してキャンプに取り組むことによって、生活リズムが到来、身体が適応していく様子がわかる。

「去年も、このキャンプに来たが、それはあまり長期キャンプと呼べるようなものではなかった。期間がとても短かった。学校への通学も、二～三回だけであまり通学をしたというかんじはしなかった。(略)しかし、今年は、だいぶ長期キャンプだという実感がした。とても長く、イヤになるほど学ばせていただいた。(略)通学するという点も、たいへんなものだと思った。去年、弁当をつくったのは、一回だけだったけど、今年は、四回もつくった。少々おいしくなかったけれど、こんなに続けて弁当をつくったのは、はじめてだ。(1984年・中学2年・男子G)」

中学2年男子Iは、前の年に体験した2日間の通学キャンプは短くて物足りなかったようだが、この年に体験した5日間の通学キャンプでは、「とても長く、イヤになるほど」とあり、かなり負荷が掛かっていたことがわかる。しかし、その負荷によって

「学ばせていただいた」という表記にあるように、この経験は大変だけど自分にとって良いものであるということ認識していた。また、弁当作りにおいては、満足できるおいしいものは作れなかったようであるが、イベント的な1回だけの弁当作りから4日間連続して弁当を作り続けたことによって、自信がついていったような様子がみられた。

子どもたちの作文からは、「通学」しながらキャンプするという事は、とてもきつく、眠たく、緊張感が伴う、かなり負荷の掛かる活動であったことがわかる。しかし、継続した体験によって、楽になったり、できるようになったり、当たり前を感じていたり、その状況が少しずつ改善していることが伺えた。そこには、キャンプ活動において、「回数」や「日数」を費やし、苦しくても自分の力で日常の生活体験を繰り返し行っていったことが、生活習慣や生活技能の向上につながっていたと考えられる。長期（通学）キャンプは、「日常生活を営みつつ、日数をこなしていくことによる教育力」という効果をもたらしているといえよう。

8. まとめ — 通学合宿プログラム誕生に至る通学キャンプのプロセスと到達点について —

以上、本稿で見てきた通学合宿プログラムの誕生に至る経緯とその到達点を、以下、5つの点からまとめを行う。

まず1点目は、庄内の社会教育実践やその歴史が、長期（通学）キャンプから通学合宿を支える人的基盤を形成し、その青年たちが公民館の子ども会活動支援を通して、旧産炭地の子ども課題や現代的な子どもの発達疎外などについて問題意識を持ち、課題解決へ向けた彼たちの行動力から誕生した「失われた子どもの生活」を取り戻すためのキャンプ実践からのスタートであった。

2点目は、旧産炭地庄内のあらゆる家庭の子どもが、参加しやすい仕組みとして誕生したプログラムであったということである。炭鉱閉山後の筑豊地域においては失業問題など経済的困難を抱える家庭が多かったことから、家庭の経済格差により子どもの教育格差を生み出すことのないよう、最低限の食事の実費負担で誰もが参加できる子ども会主催事業と

して取り組んだ。

3点目は、大人たちが取り組んだキャンプ場づくりの作業プロセス — ①自身が生理的欲求（衣食住）を満たしていくための活動、②人間関係を豊かに（自分や他者の存在意義を実感）していくための活動、③生活文化（技能や知識）を探究していくための活動 — が、「長期」キャンプの意義理解とそのキャンププログラムの原型を作っていたということである。

4点目は、キャンプを「長期」にわたって「日常的」に取り組むことへの追求から発想された「通学プログラム」であったということである。「非日常的」な一般的なキャンプでは、時間と空間に過度な負担が伴ってしまうが、長期（通学）キャンプでは、キャンプ場を拠点に、平日昼間、子どもは「学校」、大人は「仕事」という日常生活の営みの延長上にキャンプ事業を位置づけることによって、子どもも大人も長期にわたるキャンプを実践することを可能にした。

5点目は、長期と通学の融合がもたらした「教育育効果」が大きいということである。「通学」と「キャンプ・合宿」を合わせることで、子どもに適度な緊張感を与え、学校生活に支障をきたさないためにどのような生活を行っていくかなど、子ども自らが試行錯誤しながら段取りや工夫を考え、行動している様子を見ることができた。作文からは、人から与えられる体験や感動だけではなく、自分自身が「長期」にわたり「通学」キャンプに取り組み獲得した、技能、忍耐力、協調性、自信、そして達成感や満足感が多く綴られていた。

おわりに

庄内町の青年や大人たちによって創り出された長期（通学）キャンプは、1989年以降、通学合宿専用施設である旧庄内町生活体験学校（現・飯塚市庄内生活体験学校）において「通学合宿」という事業名で取り組まれるようになった

旧庄内町生活体験学校は、長期（通学）キャンプに関わってきた子ども会指導者たちが、1985～1986年の2カ年にわたって旧庄内町の子どもや子育てに関する団体関係者や保護者と開催した「庄内

町子育て懇話会」の中で、「庄内町子ども村・生活学校構想（案）²⁶⁾」を協議し、旧庄内町へ提案し、設置された施設である。専用施設を作った目的は、一年間を通じ庄内の子どもたちへ「通学合宿」事業を保障していくための仕組みを目指すためであった。

事業に取り組む場所はキャンプ場から施設へ、運営は民間主導から行政主導へと移行したが、25年以上経過した現在でも変わらないのは、キャンプ場作りに関わった大人たちを含め地域の人々によって、「通学合宿」の環境醸成—例えば、ヤギの受け入れと飼育小屋の整備、堆肥小屋の修理、ピザ釜の作り直し、畑や果樹園づくり、下草刈など—が行われている点である。

2015年4月から、飯塚市庄内生活体験学校は指定管理者による運営となり、正平氏が代表を務める「NPO 法人体験教育研究所ドングリ」が受託することが決定した。「通学合宿プログラム」は、「長期（通学）キャンプ」に関わった大人たちに戻され、再スタートを切ることになった。1979年からのキャンプ場作りに原点をみる通学合宿は、これから益々、地域の大人たちによって、創造され続ける実践といえよう。

註

- 1) 丸本孝・金丸孝・吉永昭信・半田好昭・谷口英司・正平辰男・大友辰彦「心身ともにたくましい青少年育成の一方途—自然を通して欠損体験を補う方法をもとめて—」（昭和60年度福岡県教育科学論文最優秀賞）『論文集福岡県庄内町の社会教育—子どもの独り立ちを目指して』福岡県庄内町・庄内町教育委員会、1991年、p.99-142に掲載。
- 2) 石井太賀良「学校教育と社会教育の連携を通しての教育実践—子ども会活動への参加を通して学力の基礎を培う—」『論文集福岡県庄内町の社会教育—子どもの独り立ちを目指して』福岡県庄内町・庄内町教育委員会、1991年、p.55-98に掲載。
- 3) 「庄内町誌（下）」p.486、上段1.7～p.489、下段1.9、「庄内村公民館活動の記録」、昭和23年1月1日から昭和25年1月11日。
- 4) 嘉徳郡公民館連絡協議会・嘉徳郡公民館主事研究グループ「子ども会の実態と将来の展望」、1967年。
- 5) 『庄内町誌（下）』p.507、下段1.20-p.508、上段1.2
- 6) 永末十四雄『筑豊—石炭の地域史—』、日本放送出版協会、1973年の中で「炭坑を中心とする地域社会を形成したところによってしられてきた。」「あらゆる社会経済活動が

衰弱させ、地域社会の存廃にかかわる構造的危機を招いていくことになった。＝炭坑スクラップ化」とあり、筆者はそれを「炭坑地域社会」と呼んでいる。

- 7) 『庄内町誌』下巻』、p.507、下段1.20-p.508、上段1.2
- 8) 『庄内町誌』下巻』、p.509、下段1.5-7
- 9) 『庄内町誌』下巻』、p.510、上段1.4-10
- 10) 正平辰男「キャンプのしるべ」、1957年。
- 11) 『庄内町誌（下）』p.508、下段1.10-19
- 12) 庄内町公民館「庄内町子育て懇話会」昭和61年度資料集
- 13) 正平氏と石井氏は、通学キャンプ立ち上げ時からの中心的実践者であり、現在のNPO法人ドングリの代表理事・会員を務める。
- 14) 前掲2
- 15) 正平辰男・永田誠・相戸晴子『子どもの育ちと生活体験の輝き—これまでの通学合宿—これからの通学合宿—』p.207。
- 16) 庄内町子ども会指導者協議会・庄内町公民館 資料集「庄内町青少年の森・教育キャンプ場のあゆみ」1979年9月。
- 17) 前掲17
- 18) 前掲17
- 19) 前掲17
- 20) 村上哲二（庄内町子ども会指導者協議会副会長）事例報告「庄内町青少年の森・教育キャンプ場づくりの経過と今後の課題」のレジュメと庄内町子ども会指導者協議会・庄内町公民館 資料集「庄内町青少年の森・教育キャンプ場のあゆみ」1979年9月の記録をもとに、相戸が作成。
- 21) 前掲16、p.11。
- 22) 正平辰男・永田誠・相戸晴子『子どもの育ちと生活体験の輝き—これまでの通学合宿—これからの通学合宿—』p.12の記録、石井太賀良「学校教育と社会教育の連携を通しての教育実践—子ども会活動への参加を通して学力の基礎を培う—」『論文集福岡県庄内町の社会教育—子どもの独り立ちを目指して』福岡県庄内町・庄内町教育委員会、1991年、p.75の表を参考に、著者が加筆修正を行い作成した。
- 23) 前掲17、p.11。
- 24) 庄内町公民館・庄内町子ども会指導者協議会「長期キャンプの記録」、1983年。
- 25) ここでは、以下の資料を参照した。庄内町公民館・庄内町子ども会指導者協議会「長期キャンプの記録」、1983年。庄内町子ども会指導者協議会・庄内町公民館「庄内町青少年の森・教育キャンプ場のあゆみ」、1984年。庄内町子ども会指導者協議会・庄内町公民館「第2回庄内町長期（通学）キャンプ—9泊11日のキャンプで、子どもは、何を体験し、何を感じたか—」、1985年。庄内町子ども会指導者協議会「第3回庄内町長期（通学）キャンプ」、1986年。庄内町子ども会指導者協議会「第4回庄内町長期（通学）キャンプ」、1987年。
- 26) 庄内町公民館「資料集・庄内町子育て懇話会」平成61年度